

日本銀行本館燃ゆ

関東大震災から日銀を守った男たち

大正十二年（一九二三年）九月一日正午前、関東地方南部を襲ったマグニチュード七・九の大地震は、歴史的ともいえる未曾有の大災害をもたらした。想像を絶する甚大な被害や復興の苦労は「関東大震災」として今なお語り継がれ、昭和三十五年には、震災の教訓を後世に生かすべく、九月一日が「防災の日」に制定された。

地震自体の被害はほとんどなかった日銀本店も、翌二日未明、周辺の延焼の火の手で西分館と東分館を焼き、堅牢な石造りの本館（現在の旧館）からも出火。「日銀は焼いちゃあならぬ」 空前の大災害から日銀を守る文字どおり命がけの戦いが始まった。

取材・文 清水たくや



地

震が発生した九月一日は土曜日で、「日本銀行の重役中東京に居たのは井上総裁と私とだけであつた。私は理事室の席に在つて最初の大震動を受けた。椅子に居たまゝ机に体を支え、室内ではシャンデリアの大きく動くのを見、外には物の崩れ落ちる音を聞いて、是は大事だと感じた。」

当時の日銀理事で、のちに第三代総裁となつた深井英五の回想である。日銀退職後の昭和十六年

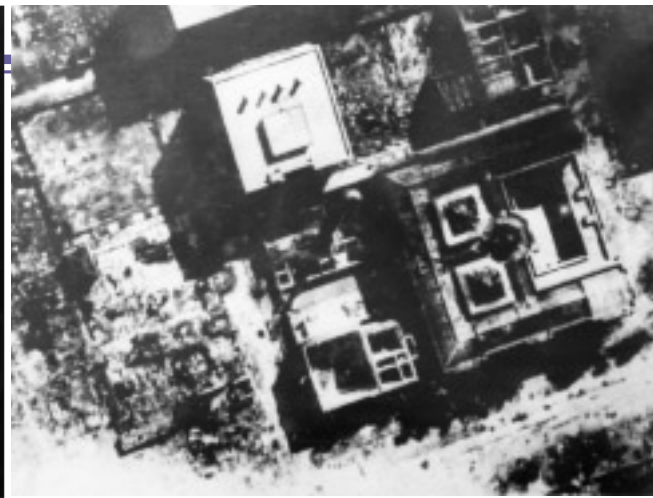
十一月に上梓した著書『回顧七十年』（岩波書店刊）の中で、「第八章 関東大震災火災」として、当事者のみが描き得る臨場感あふれる筆致で、震災時の日銀の様子が活写されている。

地震による被害は、当時新築中の北分館がかなりの損傷を受けた以外、本館などはほとんど無傷であつた。だから、当日の日銀の急務としては、地震で中断していた手形交換の円滑な処理であり、夕方には平常どおり事務を終えた。

「月曜日より臨機処置を要することあるべき事項を予想して手筈を定め、尚日曜日にも参集して、事態の推移に応じ遺漏なきを期すべくことゝした。火災は諸処に起つて居たけれども、日本銀行は耐火の設備が充分だと信じて居た上に、一方は外濠に面し、近傍は概して石造の建築であるから、火災の迫り来る様子はなかつた。夕刻に至り、最早処置すべき用事もないので、多数の臨時宿直員と守衛小使の全部とを留めて警備に当らしめ、井上総裁も私も一応退行した」（『回顧七十年』）

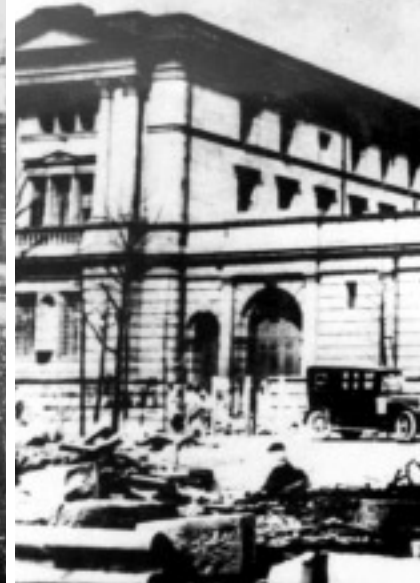
ところが、翌二日未明、深井は

*（注）……文中の敬称は省略しました。また、役職名などはすべて当時のものです。



関東大震災における日銀本店の被災状況の空撮写真（左）。東分館と西分館を焼き、落成直前の北分館も損傷を受けた。石造りの堅牢な本館（現在の旧館）は、周辺からの延焼でドームが焼け落ちた（下）（写真はいずれも昭和37年発行『日本銀行八十年史』より）

一望灰燼に帰した日本橋付近の惨状（右、中央区立京橋図書館所蔵）。関東大震災当時、日銀理事であった深井英五（上、金融研究所保管資料）は、ジャーナリストとして活躍したのに日銀に入行するという異色の経歴を持つ。関東大震災、昭和金融恐慌などの歴史的大事件の中で円滑な金融の確保に努めたのち、第十三代総裁に就任した（任期：昭和十年六月四日～昭和十二年一月九日）。



日銀からの急使に叩き起こされる。火災が本館に迫っているというのだ。銀行にとって返すと、待ち受けていたのは、建物が炎に包まれるという「悲痛の感が胸に迫った」ほどの信じられない光景だった。西と北からの延焼の火の手が予想以上の猛火となって日銀に襲いかかり、西分館と東分館を焼き尽くした炎が、本館三階の明り取り窓から内部に侵入するという想定外の事態となっていたのである。

消

防軍が一台、懸命に水を窓から中に注いでいたが、建物が広いから効果は少なかった。そのうち行員たちも集まってきて、少しでも延焼を食い止めようと、バケツリレーで罹災者の死体が浮かぶ川から水を汲んでは建物にかけた。だが、火の手を抑えるには消防車の数を増やす以外にないのは、誰の目にも明らかだった。

そこで、消防に応援を要請することになり、しかるべき地位の人間が直接出向いたほうが効果があるとの判断で、深井は部下数名を伴い、肩書の入った名刺を持参して懇請にいく。

ところが、消防車は三台待機し

ていたものの、各所での夜を徹した消火活動で、消防士は皆疲労困憊こんぱいしていた。「日本銀行はもうダメじゃないですか」と言う者もいて、なかなか動こうとしない。

深井は、さらに語を尽くし、「日本銀行は石造りで内部が細かく仕切つてあるから、火の回りが遅い。今のうち肝要の部分を消し止めれば、明朝月曜日に開店ができる。もし開店ができなかったら、全経済の停止で官民共に災害の手当てにも差し支える。だから、是非奮発願いたい」と食いつがった。「頭らしい人は之に感奮したものの、如く、それじゃあやりますと固い決心を示して起き上り、消防手を指揮して後から行くと云ふ。私達は、後からでは困る、支度の出来るまで待つて消防車の隅に乗せて貰つて行くと頑張り、居催促で、三台に同乗して日本銀行に着いた」（『回想七十年』）

本館での消防士たちの献身的ともいえる消火活動が功を奏し、三階は全焼したものの、二階と一階は一部を焼いただけで、正午ごろに鎮火した。やがて、「頭らしい人が建物から出てきて、廊下は防火



関東大震災直後、預貯金の払い戻しを請求する人々が市中の金融機関に殺到した（上、昭和37年発行『日本銀行八十年史』より）。延焼による日本橋方面の惨状（左、中央区立京橋図書館所蔵）は酸鼻を極め、川には幾多の死体が浮かんでいたという。

服なしでも入れるほどになったから、どの部屋が大切なのか責任者の指示を仰ぎたい」と言った。

「俺が先に入る。」

井上準之助総裁がそう言うて先に立ち、深井と営業局書記の平林襄二があとに続いた。廊下はまだ焼けるように熱く、上階に注がれた水が熱湯のしずくとなって、ぽたぽたと落ちてきた。

このとき、深井は消防指揮者と思われる「頭らしい人」の名を聞き忘れた。「名を訊いて置かなかつたのは私の手落で、後から警視庁に尋ねたけれども判明しなかつた。相当の手続きを経て謝意を表したいと申出たので、却て遠慮されたのらしい」（『回顧七十年』）とのことで、震災対策に忙殺されるうちに、「頭らしい人」のことも記憶の彼方に遠のいていった。

復

興に向けた日銀の取り組みは迅速だった。よもやの火

災に見舞われ、定刻より数時間遅れではあったが、三日の月曜日から開店し、震災に伴う緊急対策を着々と実施し得たのは、まさに不幸中の幸いであった。

とはいえ、営業局は焼けてしま

っているし、焼け残った部屋の机や椅子を集めて、正面玄関ホールや石段下の庭を臨時事務所にしての開店である。理事の深井自ら、できるかぎり外来者に応接して事務をさばいた。そこには、「震災火災による機能停止」から日銀を救うために懸命に働いた男たちのもう一つのドラマがあったのである。

地方との交通・通信が一時困難を極めたため、各支店長に対しては、臨機の処置を取ることを認めることとし、秘書役が支店長宛てに、「本店半焼混雑且通信困難二付営業予算其他一切臨機ノ処置ヲ取ラレタシ」と打電した（日本銀行百年史編纂委員会編『日本銀行百年史』第三巻）。

本店では、預金残高帳がすぐに見つからず、市中銀行からの預金の支払請求にどう応ずるかが問題になったが、前例にとらわれない思い切った措置で非常事態を乗り切った。当時の営業局本業部の田中鉄三郎調査役の回顧談によると、次のような次第であった。

「差し当たりすべて私の腰だめで大体の預金残高の見当をつけてどしどし支払つてやりました。（中

略）そういう思い切ったことが私に出来たゆえんがあるのです。それは、井上準之助総裁が私を呼んで、こういう非常事態になった時には一々打合せをやつては間に合わない。君が良いと思つたことは何も打合せをしないでよいからどしどしやつてくれたまえという命令があつたのです」（日本銀行調査局編『日本金融史資料 昭和編』第三十五巻「田中鉄三郎氏（日本銀行元理事）金融史談速記録」）

腰だめとは、大体の見当で物事を行うという意味だが、のちに焼けずに残っていた残高帳と対照してみたところ、全部当座預金の残高の範囲内にあり、少しの間違ひもなかったことが判明、田中は小躍りして喜んだという。

金融面から人心の安定を図るため、九月十二日には、日銀の木村清四郎副総裁が「災害ニ対スル日本銀行ノ覚悟」と題する談話を発表。これにより、震災後の経済界、金融界は著しく安堵（あんど）することができた。

ところが、このとき「帝都復興」に向けた応急対策の一環として政府の命で打ち出した震災手形の処

災に日銀を死守した兩氏



る昭和16年9月1日の朝日
 が深井英五。非常時の心構
 思出談」が同紙に掲載され

理が、その後宿痾しゆくおのごとく日本経済を蝕んでいくことになるのだから、歴史というのはわからない。

もしれないが、では現実問題として、当時ほかにどのような救済の手立てがあつたか。

災手形とは、関東大震災で

「関東大震災後の復興景気もごく」

震 被害を受けた企業に再建の時間を与えるために、被災地の企業が債務者となっている手形を日本銀行が再割引し、支払いを二年間猶予するというもの。しかし、震災で企業の支払い能力が大きく低下していたことに加え、震災前から焦げ付いていた債権も混入していたため、震災手形の多くが不

景氣の高揚をみることなく大正時代を終わるや、昭和二年（一九一七年）の金融大恐慌が発生したことを考えると、常道復帰・金融調節力回復の道は苦悩あるいは焦慮に満ちたものであつたであらうことは想像に難くない」（『日本銀行百年史』）

良性し、手形を再割引した日銀による資金回収が困難を極めたのだ。「多額の未決済震災手形の残存は、金融の不円滑をもたらし、商工業者の苦痛は次第に深刻となり、各方面においてその解決救済を望む声が盛んになり、震災手形は『金融界の癌種』と目された。政府も

苦悩あるいは焦慮に満ちた道のりは長かった。震災手形の処理が最終的に完了するのは、実に二四年後の昭和二十六年のことだ。そしてこの間には、日銀を退職して、『回顧七十年』を執筆中の深井が、震災時の「頭らしき人」と邂逅するという慶事もあった。

ついにその整理を余儀なくされるに至るのであるが、その過程で昭和二年の金融恐慌を引き起こすことになる」（『日本銀行百年史』）

昭和十六年八月のこと、非常時の心構えの参考として深井の震災時の思い出話が朝日新聞に掲載されたのが縁で、「頭らしき人」が

ある意味、歴史とは、こうした有為転変に満ちあふれているといえる。時間をさかのぼり、後知恵でいろいろ批判することは容易か

当時の第一消防署の岩佐義一消防司令であつたことが判明、八月三十一日に二人は一九年ぶりに再会したのだ。感動的な涙の再会の様

子は、翌九月一日の朝日新聞で「十九年ぶりに邂逅　震災に日銀を死守した両氏」と写真入りで大きく報じられた。

消防士たちが皆、疲労困憊して地面にへたり込んでいるところに、深井が消火の応援を頼みに駆け込んできたときの様子を、岩佐は次のように述懐している。

「何しろ皆疲労の極でした。前日から悪戦苦闘でしたからね。でも日銀は焼いちやあならぬとみんなをやつたんです。十五、六人でしたが半分つゞ交代で、その間、地面に仰向けに倒れては又代つたのです」

この邂逅が実現したとき、深井の原稿執筆は終盤に差しかかっていた。脱稿直前に、約二〇年ぶりで心からの謝意を述べる機会が得られたのは、天恵だったのかもしれない。なぜなら、このとき再会できたからこそ、十一月に出版された『回顧七十年』に「第一消防署消防司令岩佐義一氏」と明記し、「多年其の名を逸して遺憾とせる日本銀行の恩人に邂逅し得たのは私の欣喜する所である」と書き添えることができたからである。